

教師の判断

——日々のまよいにふれて——



渡 辺 貞 子

一、はじめに

毎日毎日の保育をする中で、一番大切なことは一体何なのだろうかと考えたとき、いろいろな問題や、まよいが私の頭の中を去来する。

私は、まず大切なことは、教師と幼児との間に感情のコミュニケーションがなければいけないことだと考えている。感情のふれあう中で、幼児の要求をみいだし、その上に立って、この幼児を、こういうふうにしてやりたいという気持ちをもって指導にあたっているのである。

しかし、こういうふうだから、こうしてやろうという教師の判断が非常にむずかしいということに気がつく。また、その判断が

正しかったかどうか、まよいにふれることが多々あるのである。いつも活動的で要求をもった、いわゆる主体性のある幼児は、教師との感情のつたわりがスムーズで、それぞれ満足できるように感情受容はでき、正しい判断を教師がすることができても、逆に、主体性のない幼児、いわゆる、自分からは、先生にも友だちにも自分の感情も出しきれずに、いつも誘いかけられてばかりいる幼児のいることを考えたとき、何となく、やるせなさや、あせりを感じるものである。何とかして、その幼児の発達にみあった経験や活動を自分からできるようにしてやりたい。そして、自身の経験をひろげてやるチャンスがこないだろうかと心まちするるのであるが、そのチャンスのとらえ方が教師の判断にかかわっているのだから、それを判断する力がなければいけないことを痛

感ずる。

ひとりひとりの幼児の特性を理解するとき、教師は、いろいろのまよいにぶつかるのである。だから教師の立場での判断ということを実践とおして考えることは、自分自身の幼児に対する感情の反省ともなるであろうし、それは、私の指導に対するもっとも重要な反省ともなるであろう。

そこで、これらの点について、二つの面からみていくことにする。すなわち、第一の実践例は、個人を理解しようとするが、他の幼児たちの状態をも理解してやらなければならないときに、ある幼児が、他の幼児らとちがった要求をもって行動をしたが、それが、その個人の経験をひろめるための、とても大切な機会だと教師が判断し、その個人ばかりを感情受容してしまった。そのような時の教師は他のみんなに対して、ずいぶん心の葛藤を覚えるのである。

そんなまよいをどう処理していったらよいのだろうかという、まよいにふれた例である。

第二の実践例は、幼児らの行動を理解する中で、その行動を、教師が自分自身の感情だけで判断し、その行動を変えさせたいと考えて、その幼児らの感情受容を教師がしなかったばかりに、幼児らの行動が、まったく予想もしなかった方向へむいてしまうことがあるが、いかに幼児らを理解し、判断を正しくすることが大切なことかを痛感した例である。

二、実 践 例

(一) Nちゃんが絵を描いた

十月十三日

動物園見学をした日から二日のちのことである。四、五人のグループで、たのしかったバス旅行や、動物園の動物の話をしていった。そのうちの一人が、今からポスターカラーで絵をかこうということになった。九時三十分頃、絵画コーナーをテラスへ設定したのである。動物園へ行ったときのようすをたのしく話し合っていた幼児たち五人が、それぞれ、自分の好みで色画紙を選択していた。

教師は幼児との話題の中で、「氷みたいな山にペンギンがどうのこうの……」とか、「白熊がどうだこうだ……」とかいっていることから、色画紙を与えた方がよい絵がかけそうに思ったので、色画紙の四切りを、幼児の話を書きながら用意した。ペンギンのいるところのようすやライオンの親子だとかいいながら、大きく一匹をかいて、二匹めのライオンを小さくかいたり、思い思いの動物をのびのびと、たのしそうにかいていた。

この日は、気持のよいお天気なので、外あそびの幼児らが多かったが、絵画コーナーがテラスに設定されているのに気がついて、かきたいという気持になった幼児が十時頃より入れかわり、

たちかわり参加し、とつても、たのしそうにかいている。中には、ピンクと水色、オレンジ色を使って駝鳥が画面一杯に走っている感じを出してかいたりしたのもあった。白色でくつきりと柵をつける幼児もあり、「動物園らしくっていいわね」と話し合いながら、ヒントを与えたり、絵の具の補足をしてやったりして、たのしく見守っていた。自分が満足するまで何枚もかきたい幼児は「何枚かいてもいい？」と意欲的であった。

一方、部屋の方では、別のグループが、レールセットと積み木であそんでいる。その幼児たちは、絵画よりレールセットの方がたのしいらしく、自分らで話し合っであそんでいるようすがテラスから見えていた。

ちょうどこの日は、二学期が始まってから、はじめてのお弁当持ちの日であった。お弁当は、幼児らにとっては、非常に興味があり、関心をもっている。とくに今日は、久しぶりのお弁当なので、朝からお弁当のことが話題になっていたのである。お弁当にはまだ程遠い時刻でも、きまって幼児は、「おなかすいたなあ」とか、「早く食べたいなあ」というものである。というところは、これまでにもよく経験はしたことがあるが、お弁当が話題にもなっていることだから、教師は、幼児らからの要求があれば、今日はお弁当の時刻を早めにして、十一時二十分頃から昼食の時間にしてやりましょうと、心の中で思いながら、絵画コーナーにいた。

絵をかきおえた五人の男児は、さかんにやっていたうずまき陣

とりに入っていたが、そのうち、このグループの幼児たちが、十一時十分頃、何度めかの勝負がついて、教師のところへやってきた。「先生、お弁当の時間はまだなの？」「そうね、まだちょっと早いよだけど……陣とりは勝負ついたの？」「うんうん、今僕らが二回勝つとるの」「同点なん」というので、「そうなの、二対二なのね、じゃもう一回すればどちらが勝つかはつきりするわね。勝負がついたら、お弁当にしましょう」といった。まだ絵をかいている女児二名も「先生、お弁当早く食べたいなあ」という。「そうね、sちゃんもKちゃんもその絵がかき上がったからお弁当にしましょう」というと、とつてもうれしそうに、にっこりとする。

教師はそういいおえて、部屋の中にあそびはどうなっただろうかと、部屋の中へ入ってみると、「先生、もうお弁当？」「僕らもうかたづけけるわ。さっき先生が、もうじきお弁当っていうとったやろ、きこえとったに、なあ！」と、ともだちに同意をもとめるかのようにいつている。このように、ブロックキャップやレールセットや、積み木を使ってあそんでいたグループも、それをききつけて、早めのお弁当を喜んでいたので、「今日はね、ブロックキャップも、きちんと拾い集めてちょうだい、さつきとかたづけをしたらお弁当も早くしましょう」と、いつもかたづけが乱雑なのを改めさせるチャンスにもなった。そう指示をして、テラスの絵画コーナーを教師と最後までかいていた女児二名とでかたづけ

ようとしたとき、絵画コーナーへ、ブロックキャップであそんでいたN児がやってきた。十一時十五分頃であった。

このN児は、入園以来、あまり自分から進んで友だちとのあそびの中へ入れず、いつも友だちから誘われて、やっと、あそびに入れるという消極的な幼児なのである。特に創造的な表現活動はまったく自信がなさそうな感じだ。絵画活動においても、なかなか自分から、かこうとはしない。絵画コーナーのそばへきては、すうっと、安易なあそびへ逃避している感じである。ときたま、こちらの誘いに絵筆をもつこともあるが、その絵には、まったく感情があらわれていない。

何事においても自分の感情を出さずということをしていないN児を、何とかして、ひとりて自由にのびのびとかけたりすれば、かいている過程に、うれしかったことや、感情的な開放感を発見させてやることができるだろうに、何か一つ、自信をつければ、何事にも意欲がでてくるのではないだろうか、教師は何となく、いらだたしさと、あせりをN児に対して抱いていた。このN児の感情を開放し、満足させるような手段やチャンスはないものだろうかと考えさせられる日々であった。しかしあせるのは禁物、きっと、チャンスが来るだろうと待っていたのである。

ところが、今日、そのチャンスがやってきたのだ。N児は絵画コーナーへ誘われることなく、自分からやってきたのである。そして、「先生、ぼくもかくに」と、はじめて、自分のしてみたい

気持を教師に訴えたのである。その時、チャンスは今だ、やっとN児が自分の感情を表現してくれるのだ」という思いが早鐘のように教師の胸を打った。そして無意識の反応のように、「ええ、かいてちょうだい」と答えてしまった。答えてしまったから、他のみんなには、「かたづけができたら、今日は早めにお弁当にしましょう」といつてある言葉が思い出され、その言葉が今さらながら恨めしく感じられたが、みんなもあんなにお弁当のことをたのしみにしていただからと思ひ直したり、複雑な気持になったのである。

N児は、何のためらいもなく、薄ねずみ色の四切り画紙を自分で持ち出し、みどり色で、首の太いきりんを大きく、のびのびとかけた。あまりの感激に、教師は、「まあじょうず!!」と心から絶叫せんばかりにいつてしまった。

N児はにっこりして、「もっとかいていい?」という。「ええ、いわよ、Nちゃんじょうずにかけるのね」といつてやると、またもきりんをかきだした。今まで、自分から、もっとなりたいとか、話しかけることもないN児がもっとかきたいといったり、動物園の話をしてくれるのである。「先生、きりん放し飼いにしてあったなあ」とか、「柵が小さいのに逃げていかへんだなあ」とか、とつても、たのしそうである。教師も、とつてもうれしくなつて、いろいろ話をしながら、N児の絵を見守っていた。これでN児が自信がついてくれて、何事にも意欲を出してくれるであろうと考

えていたのである。

一方、他の幼児たちは、教師と約束した早めのお弁当をたのしみに、一生懸命に、五、六人が手伝いあって、レールセットを集めてかごに入れたり、散らばっているブロックキャップを、かごを移動させながら拾い集めている。すでに陣とりの勝負がついて、部屋へ入ってきた幼児たちも、積み木を順序よく整理箱の中へ、考えながら納めているのを手伝っている。

女兒は、お家ごっこのかたづけをしたり、当番さんが箒ではくのに、はきやすいように、椅子を机の上にあげてやったり、お当番さんを中心に、どんどんかたづけがすすんでいる。当番さんが机をふくというのは一学期のお弁当の時から規則だったのを、ちゃんと覚えていたのである。バケツに水をくんで、前日から教師が用意しておいた新しいテールブルふきを持ち出して、当番さんが机をふきだすと、だれいうとなく、自分たちで、さっさと手洗いと、うがいをはじめた。

教師は、そのような様子を見ていて、何となくほほえましく感じながら、N児の行動が少々気になりだした。と同時に、時間が気になり、時計を見ると、十一時三十八分になっていた。N児はお弁当のことなど気にもかけずかきつづけたい気持がみえていた。教師は、お弁当を待っている幼児らが気になるので、N児に「もうやめにして、お弁当にしましょうか」といいだしたかったが、やっと、何枚もかきたいという言葉がいったN児に、そのようなこ

とをいうのは、とっても残酷のような気がするし、いつてしまえば、またこのN児がどうなってしまうだろうか、せっかくのチャンスをお逃がすような気がして、どうしたものだろうか、他の幼児たちが、何かいつてきはしないだろうか、まよいだした。

幸いにも、幼児たちは、さかんにお弁当の話やら、今日あそんだ、うずまき陣とりの話をしながらお弁当の準備をしていたので、ほっとしていると、N児が、またもかくのか紙をとりだした。教師は少々いらいらしながら「何をかくの」と聞いてみた。またもきりんだったらどうしようかと内心びくびくしていたら「ぞうがね、えさを食べるとここかくの」という。それならかかしてやろう、この子の胸の中は一杯何かつまっていたのであろう、それがやっと、今、自分の好きな絵をかくチャンスをつけたのだらうからと、教師は、自分で自分の感情をおさえた。

しかし、一人の幼児の感情ばかり受容していいだろうか、他の幼児がお弁当を待っている気持も大事にしてやらねばと、N児が絵をかき上げるのを見はからって、「お弁当の用意をして、みんなが待っていてくれるから、Nちゃんまた明日かいてちょうだい、とってもじょうずなのね」と切り上げた。しかし、時間は、いつものお弁当の十一時四十分はとっくに過ぎて、十一時五十分になろうとしていた。

N児と、手を洗って、教師は、「おそくなってごめんささい。さあ、おべんとうにしましょう」とみんなのところへ行ってみる

と、皆がワイワイいつている。そして、教師の顔をみて、早くお弁当にするといったのに……と、とっても不満そうな顔で、教師に訴えるのである。N児が絵をおそくなつてからかいたというこゝとに対しては何も感じてないようだったが、教師に対して、とてもきびしい不信感のまなざしをむけているのに、何かどきどきとしたものを感じたのである。そこで教師はお弁当のおくれたことについて、弁解がましく、N児が絵をすばらしくかいたこと、いろいろとたのしい話をしてくれたことを皆に説明した。皆はその絵に関心を示してくれたり、ほめてくれたりN児に対してするのであった。みんなはやつと、にっこりしてお弁当になったものの、教師としては、何となく複雑な気がしたのである。

〈反省と考察〉

○ N児の行動が、みんなとちがっているということをN児自身に気づかせずに、教師のあせりの気持から、時間と、まわりの状態をもふりかえらずに、チャンスだど、感じてしまった教師の判断が本当に正しかったかどうか、反省している。

○ また、N児のこうした行動を教師は感じられずに、皆の話題になったお弁当の時間を早めにしてしようとした判断があまかったのではないか、感情受容すべき事柄の判断を正しくする必要があると反省している。

○ N児へのこれまでの見方の判断が正しかったかどうかとも反

省している。

このような反省の中で次のような事柄が考えられる。

○ N児は朝から絵画コーナーが設定されていることを知りながら、もうかたづけの時だという頃に、やつと、参加し、やつと自分のやってみたい気持を教師に訴え、行動に移そうとしたのは、消極的なN児だから、この方向へいくまでのウォーミングアップの時間が長くかかるのだと、理解したいし、安易なあそびへ逃避しているように思っていたが、あそびながら、N児なりに気持の整理をしていたのだと考えるべきではないか。

○ N児がこれまで絵画をうちこんでやらなかったが、やってみたらできたのだという自信と、やったんだという満足感を持たせられたことは本当によかったと思っている。

○ 何枚もかきたいといったのは、感情を開放し、満足を見出す手段だと理解してくれたであろうし、自分自身をひろめたであろうと考えている。

○ お弁当が少々おくれる理由にN児が絵を描いているということをもみんなに理解させようと思えば、簡単にできると思ったが、あえていわなかったのは、かいてしまつてから、こんなすばらしくかける幼児だということをみんなに理解させる方がN児にとってプラスになると思ったからである。

○ このチャンスがあつてから、N児は、自分の感情をぼつぼつと、言葉であらわしてくるようになってきている。

○ N児がおそくなつてから絵をかいたことにより、他の幼児たちは、たのしみにしていた早めのお弁当はだめになってしまった。それというのも、N児の感情受容ばかり教師がしていたことにもあるが、N児の行動を批判しようとすれば、みんなはできなかったはずである。にもかかわらず、N児をみんなが攻撃しなかつたのは、幼児ら自身も、N児の行動と感情を受け入れるだけの感情の発達があつたのではないかと思つている。

(二) 丁君は犬がすき

十月二五日

小犬が生まれると、幼稚園の近くによく捨てられることがある。捨てられた小犬がよく園へ迷いこんできては、犬好きの幼児たちに拾われて園庭で、幼児らと一緒にあそぶことがよくある。幼児らは、自分の友だちのように扱つたり、自分らと一緒に走らせてみたり、犬の家だといつて、トンネルの中へ自分たちと一緒に入つたり、おなががすいでいるであろうといつては、教師の給食のパンをもらつて犬に与えたり、水を飲ませてやつたりして、丁君を中心としたグループがとつてもかわいがつて、あそぶようすがみられた。

最初は教師も、小犬は幼児たちにとつて非常に魅力がある小動物だし、かわいがるといふこともよいことだからと思つて、一緒

に仲間に入つてあそんだ。犬がこわいと思ひこんでいる幼児も犬好きの友だちに刺激されたり、教師と一緒にだつて安心して小犬に近づけるようにもなり、さわつたりして、犬になれるようにもなつた。生物の観察も、このようにしてやれるからすばらしいと教師も満足していた。

この日もちようど九時頃、園庭でうずまき陣とりであそんでいる幼児たちのそばへ、小犬が一匹迷いこんできたのである。きまつてリーダー格となつて犬を連れ歩く丁児が陣とりからさつそく離れて、小犬のそばへ行き、大事そうに抱きかかえた。他の幼児たちも、その犬を見ようと、陣とりあそびをやめて、かけて行つてしまつた。陣とりあそびは、小犬が来たことによつて中断されてしまひ、仲間に入つていた女児たちは、犬には興味はなく、陣とりもつづけようともしないで、教師を誘つて、ままごとや、うりやさんをしようといひだした。

教師も、このあいだからうりやさんの仲間に入つていたのである。いろいろと既製の本やあき箱を並べてうりやさんがはじまつたので、最初は見守つていた。売る役には喜んでなるが買手になる幼児が少ないので、売る人になつた幼児が満足できるように教師も買手になつて参加しながら、売る品物も増やそうと思つていたので、今日もその方へ入つてみた。テラスでままごとのおうちを設定したり、店を開きはじめていたので、ハンカチ落としてあそんでいた女児六名も、ままごとの仲間に誘ひ入れた。そしてまた、

ムシ」のようなものと思えた。これは大変！幼児たちに病気でうつつたら大変、どうしようかと心配になった。じょうずに犬を放すように話し合ひしようと思つた心もどこへやら、「T君、今日は、パンなんてないわ、その犬毛がぬけて病気かもしれないわ、病気がうつつたりするといけないから、学校の方へ置いてらっしゃい」と、犬を放してしまいたさに少々強い口調で教師は口ばしってしまった。一緒にままごとであそぶそうなんて、とんでもない。病気でうつつたりしては大変だと胸がどきどきした。T児は、何もいわずに教師の顔をながめただけで、学校の方へ犬とあそんでいた四、五人の子と歩いていった。

教師は、この時、犬を置いてくることをT児も、みんなも承知したものだとはかり思ひ、こちらのあそびに入ってくることを期待して、そのまま、テラスで待っていると、学校の方へ行つた五人の幼児が、「先生！」と叫んでかけ戻ってきた。S児の手に一羽の雀がもたれている。「ほら、学校へ行くところになあ雀が死んだ」といって、死んでいる雀を大切に手のひらの上に乗せて見せるのである。(注、学校へは園庭つづきでいける)「まあ、かわいそうに、どうしたのかしら、お墓でもつくってやったら？」といつてしまった。T児も、犬を抱きかかえたまま、墓つくりと園庭の隅をめがけて、五人の仲間に入つていった。犬はどうつするつもりかしら、きつと墓をつくつてから、T児は置きに行くであらうと思つて、何もいわなかったが気がなつた。このグル

ープは、小動物や、昆虫が平素から好きで、興味をもち、バツタが死んだといつて墓をつくつた経験があつたので、教師はそちらへ参加せず、そのまま、うりやさんの品物つくりをすることにした。

十時十分頃、墓をつくつていた五人の幼児たちが、教師のところへやつてきた。やつとあそびに入ってくれるのだなあと内心ホツとしたが、それもつかのま、五人の幼児たちの後から、毛をビタビタにした犬がテラスの方にいるのに気がつき、びっくりしてしまつた。S児が「先生H君なあ、水たまりへ犬を入れたに」といつている。教師はさつそく、犬のところへ出ていき、「どうしたの？」と五人の幼児たちに聞いてみた。うりやさんをしている幼児たちもびっくりしたような顔で、「かわいそうやわ、かわいそうやわ」といつている。T児らも、妙な顔つきで、犬をビタビタにした訳を次のように説明するのである。

死んだ雀がかわいそうなので、土を掘つて葉っぱを敷いて、また葉っぱをかけて、土の中へ埋めてやり、他の幼児たちが石ころを拾つてきて、きれいに並べたり、土を高くもつたりして、お墓をつくつていたら、雀が死んでいたという話を、あとからききつけた幼児たちが死んだ雀をみたいといつてやつてきたのだそう。それで、H児がそおつと、雀を土の中から出して、まわりにいた幼児たちに見せてやつているうちに、小犬が雀を食べてしまつた。

H児は、びっくりするやら、かわいそうやらで、おこってしまつて、小犬を雀から放そうとしたが放さないのです、そのまま見ていたが、犬に対してとつても腹が立ったので水たまりの中へ放りこんでしまったというのである。

これをきいていた幼児たちは、H君、かわいそうなことするなあと、H児に対して批判的な言葉をかけたり、かわいそうに雀が食べられたんだつて、と犬に対する感情と、雀に対する感情と、H児に対する感情と、それぞれ騒然となった。

H児に気持をきいてみようと、「どうして犬を水たまりへ放りこんだの？」と教師はH児にきいてみた。「ほんでも、雀を食べってしまったもん、雀が、かわいそうやった。T君が、あの時、犬を置いてきたらよかつたんや、先生が病気かもわからへんといつたのに雀食べてしまうもん、狂犬やわ」とこれまで自分も犬とあそんでいたのに、T児に対し少し不服そうである。T児は、「この犬なあ、よう見てみたら、病気とちがうぞ、けがした跡が、毛がはえとらんや。それに犬が雀を食べると思わんやないか、おなかですいとつたんやぞなあ」と、一緒にあそんでいたS児に同意をもとめる。「ぼくもびっくりしたに、羽根二枚残したただけで、みんな食べてしまったんやもん」とS児もびっくりしたようすを話す。「あの時なあ、雀をみせていたのを、犬が自分にもらつたと思つて食べたんとちがう」とT児がいえば、H児もその言葉に何か感じとつたのか、きまりわるそうな顔で「ああそうかもわか

らんなあ」「そうやったんか」と、自分が犬を思わず水たまりの中へ放り込んだのを悪かつたと思つたようであつた。

みんなは、H児が犬を水たまりに入れたのを悪いと思つた気持ちも、T児が犬の病気を、たしかめた態度も、みんな理解できたのか、なごやかな雰囲気にもどつたので教師はやれやれと思つたが、何と自分のあさはかな判断をなげかわしく思つたことか、このような事件があつて、それから、うりやさんもまごともかたづけられ、みんな「犬のおまわりさん」のうたをうたつたり、リズムあそびをたのしくして帰つたのであるが、リズムの間、犬はテラスで、ぬれた毛をかわかししていたが、幼児らの帰るころには、どこかへ行つてしまつたのかいなかつた。用務員のおばさんが、食物をやつたら、ぬれた毛をふるわせながらガツガツ食べて、どこかへ行つてしまつたとのこと、「よっぽどおなかですいていたんですね、先生」ときかされたとき、何か悪いことをしたような気がして、本当に心の重い一日であつた。

〈反省と考察〉

○ T児が犬をつれて、教師のところへ何か食物をやつてほしいといつてきた気持を全く無視してしまい、教師は毛のぬけた犬をちらつとみただけで、「このきたならしい犬、病気だったら、どうするかしら」という気持が突然にして、そのままの感情でT児に接してしまつたことに問題があつたと反省している。

○ 食べものを犬に与えなかったのは、与えない方がT児らが犬から放れてくれるであろうと判断したからであったが、それがかえって事件を起こす原因になっていることに気がつき、教師の判断が幼児らの行動をくるわせてしまったことを深く反省する。

○ T児らを犬から放し、こちらの活動へ参加させようと判断したことも問題があるようである。時間を長くかけてやって、T児らが犬と満足するまであそんだのちにこちらのあそびに誘っておれば、無理はなかっただろうとも考えさせられたが、何より心配だったのは犬の病気で毛がぬけているじゃないかということだった。毛のぬけている部分をよくたしかめてみる余裕が教師になかったことが悔やまれてならない。

以上の反省の中から次のようなことが考えられるのである。このことは教師の判断とは直接に関係ないが、判断を支えているものであろう。

○ 幼児らのもっている自己中心的な面が動物への感情にもよく出ていると思った。またアニミズム的な考え方が非常に強く、動物をいたわったり、親しんだり、世話をしたいといった気持が非常に強いし、また、死を悲しむといった感情も、この年齢の幼児たちにはすでに芽ばえていることが理解された。

○ また、幼児には、あそびの流動性があるときいていたが、動物への愛情のち方にも、流動性につながるものがあると感じられた。というのは、最初、T児たちは、犬を大切にかわいがっ

ていたが、たまたま教師に病気かもしれないから学校の方へ置いてくるようにいわれた。すると幼児たちは犬が病気のかなあと思いながらか、置いてこようと思った。その途中たまたま、死んでいる雀をみつけた。するとみんなは犬より死んでいる雀の方に愛着をもち、犬はどうでもよくなってしまった。その上、悲しむべき雀を食べてしまった犬が一番悪いということになり、それをやっつけてしまう。

最初は、かわいがるのだという目的があるように見えても考えているうちに考えが思いつくままにどんどん変わっていくのが大きな幼児の特性なのだあと、改めて考えさせられた。

○ 犬の世話をしたり、かわいがる気持はとっても大事だけれど、犬に病気があったり、かわいがっているひまにいたずらでもして、かみつかれたりして、その犬が狂犬病だったりしたらと考えると、ゾッとする。とっても不安なのである。捨てる人は幼稚園の近くだったら、幼児らにかわいがってもらえると思つてのことだろうが、困つたことだと考えさせられる。

三、むすび

教師の判断ということがいかにむずかしいかということが実践をふりかえってみて、つくづく感じさせられる。

個人を理解しようとするとき、その幼児についての先入感があ

ると、判断にあやまりが出てくる。その時のその幼児の感情と行動を先入感ですてて見てみるということも大切なことだし、その幼児がどういう要求をもって何をしようとしているのかということとを理解してやり、それから、教師はどうすべきなのかを判断することが大切なことじゃないだろうか。教師が幼児らの中に立って、そこでどういうことをするかをきめるかは、教師自身が判断するよりほかないだろうが、教師の責任にかかっていると考えている。

教師が判断し、行動する場合、教師の考え方があまり構造化しているとき正しい判断をあやまる場合がある。教師が予測してないで起こったことを自分にとり入れていけるような構造がなければいけないのではないだろうか。要するに教師の考えが固定化してはいけなくて考えている。しかし、教師には予測性がなければいけないと考えられるが、先を見すかして判断するということはこれまた危険なことが多い。予測を働かしすぎると、あせりができる。教師の方からあせりを出してしまうと失敗することがある。現場のあるところどころで、よく危機的な場面につつかりどうしたらよいかというまよいが生じるのである。

また、日々の保育の中で幼児と教師との感情のふれあいから、幼児期の感情教育がいかに大切なことが日々の実践の中で感じとられるが、それにもまして、大切なことは、教師（私）自身が豊かな感情をもつようにするために、常に努力をしているかとい

うことを深く反省させられるのである。

教師の感情だけで、幼児の物事を判断されていたのでは、これからぐんぐん伸びようとする芽もものびないし、きれいな花すら咲かせようにも、つぼみで枯れさせてしまっていては、幼児期における人間形成はまったくゼロになるだろう。よりすばらしい幼児期を育てるために、私は、たった今から、私自身豊かな感情をもてるように精進し、いろいろのまよいにふれながらも、個々の幼児が満足できるような、すばらしい保育をしようと願ってやまないのである。

（四日市市立海蔵幼稚園）

倉橋惣三選集四巻発売中

- 第一巻 ☆幼稚園真諦
☆子供讃歌
☆フレーベル
- 第二巻 ☆幼稚園雑草
- 第三巻 ☆育ての心
☆就学前の教育
- 第四巻 ☆保育案
☆初期の著作

など、第一巻～第三巻以外の、かつての単行本としてまとめられなかった珠玉の論文、随筆、揮毫。

B 6判・特製本
各巻定価 700 円 発行フレーベル館